

関東管領・上杉顕定の死後の内部分裂。

関東の豪族たちも、否応なくその枠組みに従わざるを得なくなっていた。

のちに宇都宮氏は〈宇都宮錯乱〉と呼ばれる家中内乱を引き起こすことになるが、この対立構造は、関東を動乱の渦中へと誘い、複雑怪奇に攪拌していったのである。

永正七年（一五一〇）八月一日、里見勢は上総国に兵を差し向けた。

これは単独の軍事行動ではない。上総国の大きな対立構造は、千葉氏執事・原氏と真里谷武田氏の間にある。

里見勢はこの軍事行動を通じて、真里谷側に附いたということになる。

この軍勢のなかに、里見太郎義豊の姿があった。遅ればせながらの初陣である。

「若殿は書物兵法に通じておられると存ずるが、血腥いこともよく知っておかれるとよい。家督を継ぐ者は、兵の痛みを知らねばなりません。でなくば、家臣は附いて参りませぬぞ」

傍らに付き従うのは、叔父にあたる里見左衛門佐実堯である。

当初は正木通綱に随行が任じられていたが、直前になって

「この際はつきりと、諫言も厭わぬ立場の者が相応しい」

里見義通がそう沙汰したのであった。

それに、近年久留里まで勢力を伸ばし、なおかつ内房一帯を掌握している実堯が傍にいてくれることは、敵地といえども心強い。

「儂は孫子も読んだ。諸葛亮が如き軍配も揮える自信もある。別段重い甲冑を着込まずとも、机上で戦さを計れる」

面倒臭そうに義豊が呟いた。

「そのような口は、人の生き死にを目の当たりにしてからになさりませ」

毅然と実堯が口を差し挟んだ。

「兵は将棋の駒に非ず、血を流し、痛みを知る

一己の人なり」

実堯の齒に衣着せぬ申し様は、これまでの取り巻きと異なり苦痛であった。

なんと小煩いことだろう。しかし、合戦が始まると、義豊の甘い考えは霧散した。

はじめて目の当たりにした合戦は、綺麗事を通じるものではなかった。生きるために殺しあい、その矢面に立たされる兵たちの生々しい怒号や悲鳴が幾重にも響き渡った。

「よろしいか、若殿。すぐれた将とは、味方の兵を損なうことなく、如何に多くの敵を屈するか、そのために、地の利を生かした軍略を有します」

「は……」

「孫子曰く、敵を知り、己を知らば、百戦危うからず」

「知っておる」

「まずは敵を見定めることが肝要。敵の弱きを見て侮ることなかれ、強き様をみて恐ることなかれ」

「……」

「若殿がまことに優れし将になることを、大殿も望んでおられますぞ」

しかし、義豊は戦場の風に曝され、頭の中が真っ白になっていた。自らが太刀を取らずとも、その身震いは止まることがなかった。

この合戦に投入された里見勢はごく少数である。もつとも双方とも小競合い程度の戦さであったから、損なう兵は数える程であった。

この戦いは原勢の勝ちであった。

真里谷勢は手慣れた采配で戦場を後にし、里見勢もそれに遅れることなく兵を退いた。

里見義豊が少しずつ変貌していったのは、この合戦が契機だった。

これまで余人に向けなかった関心を、積極的に、若い在地豪族たちへ向けるようになったのである。

「これはこれで、よいことだろう」

里見義通は大喜びであった。

在地豪族にもそれなりの理がある。（二統と

いう一言で片付けていいものではない。義豊が後継者への道を歩み出したと、義通は信じようとしていた。

やがて義通は、義豊の名前で政を始めた。肝心のところは後見が締め、在地豪族を巧みに用いる融和を試みたのである。

「上総介は隠居に候や」

斯様な風聞が安房国内に囁かれたが、義通は敢えて否定をしなかった。

十  
十  
十

## 上総大乱(1)

夢酔 藤山